

中世私撰和歌集 『邦高集』の研究

— 出典調査 —

立正学園女子短期大学文芸科
古典ゼミナール

解 題

松 野 陽 一

邦高集は、宮城県立図書館伊達文庫に蔵される三冊本の私撰集である。近年、中世に成立したと見られる私撰集が次々に発見され、和歌文学会の手で、その機関誌「和歌文学研究」第十四、十五号にまとめて紹介されたが、この邦高集もその際に報告されたもので、稿者もその解題執筆を担当した。

稿者の指導する昭和十九年度文芸科二年の古典ゼミナールでは、本書の研究をテーマとして取上げることとし、四月以来、その基礎作業としての翻刻と出典調査を行ひ、目下は初句索引の作業に入ったところである。現在の段階は、まだ出

典調査が完了したばかりのところで、内容の分析までするに至っていないので、完全な形での資料的価値の報告をすることはできないが、折角「文芸論叢」創刊といふ機会を得たことでもあり、現在の段階でなし得る限りの研究成果を発表することとしたい。勢ひ、収載歌の出典、或は他資料との共通歌についての分析といふ点に偏らざるを得ないが、この種の資料では価値の大きな部分がこの点にかかはりあつてゐることを思へば、その意義は決して小さなものでないといへるであらう。

本書の書誌的解題については先述の報告で触れたが、略述

すると、縦二七・五糶、横一九・六糶の袋綴三冊本で、題簽・内題共に「邦高集 上(中・下)」料紙は楮紙。墨付、上
||八一枚、中||八六枚、下||九一枚。一面九行、一首一行書
き、詞書四字下り。江戸中期の写。朱注、掛点等はない。宮
城県立図書館伊達文庫、及び、伊達伯観瀾閣図書館の印記が
各冊巻頭に、又、巻末に「璧」といふ菱形印が二種ある。収
載歌数は、その後の調査で正確な数が判明したので、前回の
報告は訂正されることになる。即ち、上巻四六九首、中巻五四
四首、下巻五六〇首、計一五七三首である。但、一四一一首
目は作者名(九条左大臣)のみで歌は欠けてゐるが、一首と
して計算した数字である。なほ、これは、あくまでも伊達文
庫本についての歌数であり、後述するやうに本書は原本とは
考へられないから、原歌数を示すものではない。又、部立は
なく、類題集でもない。作者名を記す歌も多く、約半数に及
んでゐる。

さて、今回、我々の行った出典調査は、極めて初歩的な、
しかも結果として大変不備なものであることを認めないわけ
にはゆかない。しかし、この程度の調査でも、一応の見通し
をつけることができたやうに思はれる。

作業の過程を述べると、翻刻し、一連番号を付した原稿に
基づいて、国歌大観、続国歌大観、群書類従、桂宮本叢書、碧

沖洞叢書本林葉集、夫木抄等を用ひて検索した結果を台帳
に記入し、更にそれを出典別にカードに転記した。「出典一
覧」はこのカードを分類整理したものである。この作業の過
程で、次第におほよその配列基準が明らかになつてきたが、そ
の結果、最終的な吟味の段階では検索用のテキストを限定す
ることになり、勅撰集、新葉集は国歌大観、古今六帖、歌仙
家集、曾丹集、頼政集、秋篠月清集、は続国歌大観、赤染衛
門集は類従本に一連番号を付したものの、林葉集は碧沖洞叢書
本をそれぞれ用ひて記号化することとし、更に板本の類題和
歌集を加へ、その他は一切用ひぬこととした。かやうな方法
をとつた理由をのべる。即ち、当初は、作者別の収載歌の集
計を目標にして作業を始めたのであったが、作者表記は本書
に於いて統一されたものでなく、原典からそのまま転記され
たものであることや、作者名の記されてゐない歌が、必ずし
もその直前の表記をうけるのではなくて、別人の歌である場
合の多いこと等から、作者別集計はひとまつ見送り、出典調
査を進めた結果、本書の配列のおほよその基準として、同一
出典から何首かづつまとめて並べられてゐるのが判明するに
至つた。例へば、冒頭部分を例にとれば、

(以下無断で用ひる漢数字は本書歌序番号)

一〇 順集、二一〇 公忠集、

二二〇 赤染衛門集、二七〇 能宣集

といった具合で、それぞれの歌群は、出典における配列順に
ほぼ並んでいる（一覽参照）のだが、更に、かうして幾つか
の異なる出典からの歌群が並んだ後に、先に出たある出典の歌
群が再び現はれる場合には、その同一出典歌群の出典におけ
る配列順序は先行する歌群と接続してゐる場合が多いのであ
る。恐らく調査の不備から、（と考へられるが）若干この原
則に合はない部分もあるが、この傾向は全巻に涉つてをり、
これは、本書の編者が、原典から歌を抄出する際、何首かづ
つまとめて記載していったことを示す現象と考へられ、本書
の性格を把握する為の最も重要な鍵にもなる特徴といつてよ
かるう。この原則めいたものを見出したことは、以後の作業
に大変容易な目安をもたらしにくれることとなつた。つまり
勅撰集や私撰集の歌は、当然、同時に私家集その他、別の出
典にも含まれることになるわけだが、おほよそこの原則によ
つてどちらから採つたかを、推定し得ることになつたからで
ある。

ちなみに、この原則によつて、本書は本来は現在の如き三
冊に分けられてゐたものではなく、全体で一卷を為す本であ
つたことが推定された。即ち、上巻の卷末歌（四六九）は、
斎宮女御集の歌であり、中巻々頭の四首（四七〇～四七三）
も同集の歌である。又、中巻々末歌（二〇一三）は、下巻々
頭の三首（一〇一四～一〇一六）と赤染衛門集に連続して配

列されてゐる歌である。つまり、このことはどちらも本来連
続してゐた部分であつたことを示すものと考へられるわけ
であつて、出典調査の結果本書では歌が欠脱してゐると考へ
られる四四、七一、一四一〇の部分で、何代かの書写の過程
で生じた欠陥と考へられることと合せて、本書が原本ではな
く、現型は、単なる分量上の切れ目を誤認したか、強引に分
けたか、いづれにせよ、内容を全く理解しないまま、後人が
各巻に問題を付して分冊してしまつたものだと思定される。
さて、かうした原則を目安として調査を進めていつたので
あるが、最後に、どうしても検索し得ぬ歌が現はれてきた。
その頃、井上宗雄氏から類題集との関係も考へてみたら、と
いふ御示教を頂き、板本の類題和歌集（年刊三十冊本）
が検索用テキストに加はることになつた。そして、一首を除
いては全て分類カードに記載されてしまつたのである。一方
では新出歌を期待してゐただけにあつけないくらいの結果で
はあつた。しかもまたこれは、あの鎌倉から室町、江戸に至
る多元的な成立過程を持つ数多の類題集との関係を考へねば
ならなくなつたことを意味するものであり、今回検索に用ひた
類題和歌集に触れない部分、つまりは長い詞書を持ち、本書
の私撰集としての独自性を示すと思はれる歌群すらも、老大
な、何れかの別の類題集或は私撰集と重つてしまうかもしれ
ぬことを予測させるに至つたのである。折角検索し終へたつ

もりの勅撰集所収歌の大きな部分が、同時に類題和歌集にも見出されたことは、それを予感させるものがあった。しかし、ここに今回の調査の限界があるとはいへ、ともかくも帰納し得る限りの結論を引出して、座標を定める必要はありさうである。否、むしろまだ統一的に把握されていない類題集相互間の関係解明の手懸かりとなる積極的な意味をこの調査は持つこととならう。

そこで、帰納されてきた主な点をあげてみると、長文の詞書を持つ歌と題詠歌が半々位の割合で、題詠歌の一部には明らかに類題的配列をうかがふことができること、題詠歌はその出典が古今六帖、類題和歌集等の私撰集に集中していること。又、長文の詞書の歌は、勅撰集と、歌仙家集、赤染衛門集、曾丹集、頼政集等の平安期の私家集に集中していることなどがあげられると思ふ。これらの現象の中では、先述した類題和歌集との関係が、本書の成立の問題と合せて注目される。即ち、付表の同集との共通歌を参照して頂きたいが、本書の八三八から一四四四にかけて断続的に配列されている二百首程の歌群は、順序は前後することはあっても、全て類題和歌集の方の同じ題の部類に同じ作者の同じ歌として見出されるものなのであり、これらは、類題和歌集から抄出されたとする可能性も一応は想定し得る傾向を示しているのである。しかし、類題和歌集は、先述の如く成立がかなり複雑

で、井上氏によると鎌倉、室町以来の多種の類題集が統合編成されたものだといふことであるが、さすれば、逆に本書を類題和歌集の前に位置づけることも可能な想定である。事実、例へば、九四五〜九六〇の六首は、頼政集の歌群であるが、この中、九四五・九四七・九四八の三首は、類題和歌集にも同時に見出される。そして、この前後は題詠歌の集中している部分で、殆んど類題和歌集との共通歌が並んでいるのであるが、先述の配列原則によりすれば、この場合の出典は、類題集より頼政集がそれに当ると考へるべきであらう。従つて、少くとも勅撰類題和歌集に対しては本書が先行していると言してもよいと思はれる。しかし、いづれにせよ、この類題集との近似性には注目すべきであり、統現存六帖や明題和歌全集との関係も密接なもの如くに考へられるので、本書の成立を室町期頃に比定することも決して無理な推定とはならぬことであらう。

出典別でいへば、勅撰集では後拾遺集三五首、千載集四九首、準勅集の新葉集四二首、私撰集の古今六帖一四七首、私家集の新仙家集四四二首、赤染衛門集一四九首、曾丹集三二首、頼政集一七一首、林葉集一六五首が大量入集源であり、平安中期と末期に集中的に現はれていること、特に単独私家集として、赤染集、林葉集、頼政集の歌が多いことは際立つて居り、ほぼ同じ中世私撰集と考へられる書陵部蔵「資賢集」

が俊恵、頼政の入集歌の多いことなど何らかの相関々係のありさうなことを推測させるものがある。

以上の点から、本書は、部類もしくは類題意識は明確ではないが、室町期の数多い類題集類と密接な関係をもった、草稿的性格の私撰集といふ、大雑把な規定ができるやうに思はれる。記さねばならぬ点は余りにも多いが、今回は、配列原則と出典からのおほよその成立期と性格とを述べるにとどめることとする。

最後に、付載する出典資料一覧について、凡例にそへて記しておきたい。

ここに掲載する一覧では、本書所収歌一首について出典一首をあげているが、これには当然問題があらう。しかし、ここで敢てさうしたのは、この方が配列原則をよりよく反映すると考へたからに他ならない。調査した結果をそのまま転記するには、現在の不十分な段階でさへ、あまりにも紙幅を要することが判明したのと、この段階ではどの道、完璧は期し得ないといふ判断とからの処置である。従つて、この表ではその歌が幾つかの資料に重出してゐるとしても、本書の配列原則に合はぬものは載せてゐない。

又、検索に用ひたテキストの問題、例へば躬恒集は、恐らく続大観本に拠つたものではないと見られ、ここでは古今

集、後撰集の歌に数へたものの中に多く躬恒の歌の存在するところからそれが裏付けられる点や、テキストの類題和歌集には入っていないが、何らかの同類書にあると推定される、別雷社歌合の存在等は、テキストの範囲を更に拡げた場合、ここに掲げた分類はまだ大きく変化する可能性があることに注意しておきたい。

これ等、今回の調査の持つてゐる難点は、順次、機会を得て補訂してゆくつもりである。

欄筆に當つて、本書の調査に便宜を与へて下さった宮城県立図書館、複写その他にお世話を頂いた東北大学の片野達郎氏に対し、深く謝意を表する次第である。

☆

☆

☆